

運命の操り人形

seireos

プロローグ零

人の運命は決まっている。

無論、誰も自分の運命を知る事はできない

。

もし、知る事ができる人がいるとすれば、それはその人は自分の運命を知る運命であった、

ただそれだけの話。

——もしくは、人の運命を管理する『死神』と称される種族——

『死神』の仕事はあるルールに則って人の運命を管理する事。

無論、人間はそんな事知る術もない。だが、彼らは確かに存在し、人の輪廻を操作する。

人は受け入れるのか、はたまた抗おうとするのか、今輪廻を超えんとする物が現れる。

広大な大地にそびえる大きな城。辺りは一寸の光も届かぬ漆黒の闇。

ここは運命の管理者、『死神』と言われる種族のみが存在する世界『冥界』

彼らの仕事は人の運命を管理すること。彼らは人を決められたタイミングで殺す、あるいは死ぬように運命のポイントを設置する。また、時には分岐点を作り、選ばせる。彼らはこのポイントを設置し、人を決められた結末、即ち人生の終着点に導き、次の人生へと導く。

導かれた魂は神により新たな器へと移動され転生する。。

魂の導き、輪廻を操る、それが彼らの仕事。

『おい、プルートの奴がどこいったか知らないか？』

虎のような仮面をした人物が声を掛ける。

『オルクス、久しぶりだな。悪いが見てないな。プルートがどうかしたのか？』

『アイツに任せていた人間が突然死亡した』

『その言い方だと、決められたルートから外れたって事か？』

頷くオルクス。決められたルートから外れる、この言葉が意味するのは本来の結末とは違う結末を迎える事。これが起こりうる理由として考えられるのはポイントの設置を上手くしなかった、できなかった場合、即ち管理が甘いということ。

そして、もう一つ考えられるのは管理するものが意図してルートが外れるようにポイントを設置したという可能性

無論、これは本来あってはならない重罪である。意図的にルートを外すというのは自分の気分で人間の運命を捻じ曲げるという事を意味する。

『それで理由を問い詰める為にプルートを探しているんだが、見当たらなくてな』

『わかった。ちょっと、人間界をしてみるか』

オルクスと話していた死神が目の前の水晶に手を乗せる。水晶に手を乗せる事、数分後、違和感に気が付く。

『ン！？これは……』

『どうした？』

『人間界のある場所から俺達と同じ死のオーラを感じる』

オルクスはこの言葉に嫌な予感を感じる。死のオーラというのは基本的に死神しか持ち得ないものである。それを人間界から感じるという事は、人間の中に『死神』と呼ばれる種族が紛れている事になる。

道路に倒れている遺体。まるでビルの屋上から飛び降りたかのように、見るも無残に潰れているソレを見て、男は不気味な笑みを浮かべる。

「どうやら失敗してしまったようだね。まあ恨むなら自分の運命を恨むんだな。さて、次のモルモットを探すか」

不気味な事を呟きながら、男はその場を離れた